

岡崎市議会議長 様

支出番号

8

会派名

自民清風会

代表者名

磯部 亮次

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政務活動報告書

令和7年9月18日提出

活動年月日	令和7年7月30日（水）～31日（木）	
氏名	野々山雄一郎 野本 篤	
用務先 及び 内 容	1 7月30日	用務先 宮崎県 宮崎市
		内 容 グリーンスローモビリティ「ぐるっぴー」について
	2 7月31日	用務先 宮崎県 日南市
		内 容 飫肥城下町食べあるき・町あるき事業について
	3 月 日	用務先
		内 容
	4 月 日	用務先
		内 容
備 考		

同行者 野本 篤

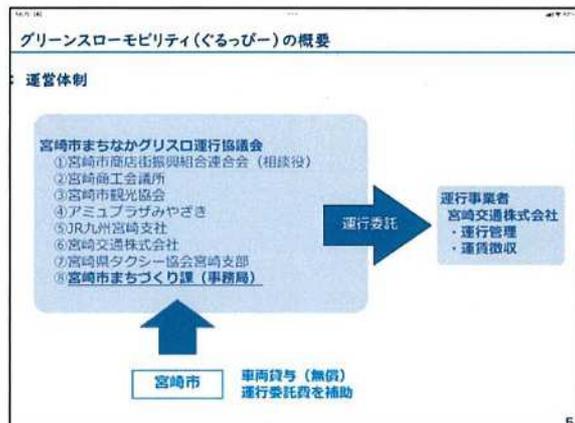
令和7年7月30日(水) 宮崎県宮崎市 都市整備部 まちづくり課

グリーンスローモビリティ「ぐるっぴー」について



① 「ぐるっぴー」の概要

- ・時速 20 km未満で公道を走る電動車を活用した移動サービス。市内の小学生 1588 件の中から「ぐるっぴー」の愛称を決定。
- ・運行エリアは J R 宮崎駅周辺を中心市街地、約 2.1 km。運賃 100 円（小学生以下無料）一般乗合旅客運送事業として運行。
- ・10：30～17：30、平日 15 分間隔で 24 便、土日祝 12 分間隔で 34 便（7、8 月は 13：00～15：00 運休）2 台での運行。
- ・年間利用実績は右肩上がりで令和 6 年度は 57,645 人。一便（定員 9 名）あたり、休日は 7.7 人、平日は 3.4 人の実績。
- ・令和 2 年ぐるっぴー運行開始後、運行ルートである広島通りの無電柱化・美装化は宮崎市事業で、高千穂通り再整備「ひとつ中心の歩行空間の整備」は宮崎県事業で行われている。既存商店街と駅のオフィス地区での商業施設や宮崎大学のサテライトキャンパスがオープンするなど「ぐるっぴー」ルート上での公民の開発が進む。
- ・運営は宮崎市まちなかグリスロ運行協議会。運行は宮崎交通（株）。



運行経費

(収入) (単位：千円)

区分	R6決算額	R7予算額	備考
繰越金	2,243	2,489	
市補助	12,820	10,128	(R5決算) 14,315千円
運賃収入	5,028	3,091	(R5決算) 4,440千円
協賛広告	3,075	2,500	(R5決算) 2,649千円
合計	23,166	18,208	△4,958千円

(支出) (単位：千円)

区分	R6決算額	R7予算額	備考
運行委託料	16,924	12,660	宮崎交通（平日・昼ダイヤに特う減）
修繕費	350	370	
事業費	3,147	2,372	ラッピング・暑熱対策・PR職員等
預税公課	256	350	消費税・法人税
予備費	2,489	2,456	次期繰越
合計	23,166	18,208	△4,958千円

② 経緯・背景

・宮崎駅から車で10分(約4km)の郊外に九州最大級の大型商業施設オープン。

・大型商業施設が開設前2004年は中心市街地で552.9億円の小売販売額があったが、2007年中心市街地417.3億円・ショッピングモール274.9億円、2014年中心市街地291.5億円・ショッピングモール257.7億円と大型商業施設が売り上げを維持する中、中心市街地の売り上げは大きく減少。

・2020年、宮崎憲による宮崎駅西口駅前広場の再整備、JR九州・宮崎交通による「マミュプラザ宮崎」を開業。駅から中心市街地へ「賑わい」と「ひとの流れ」を誘導するための「手段」として、グリーンスローモビリティを導入する。

・2019年11月29日～12月25日実証調査(3244千円) 2020年11月20日より本格運行。

・検討員会では、渋滞発生が懸念材料であったが、運行ルート基本左折を行い、中心市街地の商店街の後押しもあり、現在まで渋滞等安全面を含めたクレームはない。

・導入費 ①備品購入費 車両購入費24873200円×2台 ②工事請負費 車庫シャッター費4606800円 充電用電源装置139700円 ③補助金4037280円 主なもの→停留所・時公表など877800円 車両機器整備2069976円



③ 取組の成果

・運行ルートを中心とした企業からの協賛。運営サポーター(車内や市HP等に企業ロゴ掲示)

・ターゲットを子ども達に、車外ラッピングによる広告協賛



- ・高千穂通りでの道路空間活用社会実験
- ・アミュ開業+ぐるっぴー運行で高千穂通り活用に向けた検討へ（当時はコロナの最中）
- ・高千穂通り周辺地区の道路空間活用協議会（国県市等で構成）
- ・オフィス街から人の集う空間へ、広い歩道を活用



- ・HAROW（NTT広島ビル）に、宮崎オープンシティ推進協議会が開設され、まちづくりのための中心市街地の挑戦の場となった



- ・HAROW前歩道にはくつろぎ空間、敷地内のくつろぎ空間との連動が見られた。HAROW内には飲食店もあり、この空間での飲食も可能。

#### ④ 今後の展開

- ・安全空間確保のため、自転車と歩行者の動線（現在、自転車専用道を整備中）
- ・歩道を活用した、オープンカフェやイベント開催等による賑わい（「ほこみち」制度の活用）
- ・民間の建替えが進み、敷地内に設けられたオープンスペースにテラス席など設けるなど、1階の商業テナントによる日常的な賑わいを生み出す仕掛け
- ・企業が集積するエリアでは多様な人に交流があり、それらの交流を賑わいに転嫁させる
- ・ぐるっぴーは、運行ルート上の賑わいやそれぞれのエリアの街の顔が楽しめ、単なる移動手段だけでなく、街をテーマパークのように回る乗り物として愛される。

## 所感

郊外に大型商業施設が開設し、中心市街地が縮小していくというパターンは岡崎市にもある。岡崎市ではQURUWA計画による中心市街地活性化を取り組んだが、今のところ投入した資金分の効果は得られていないと感じる。

移動手段に歩くことを選択させることは間違いではないが、歩く以外の選択肢が必要。

「ぐるっぴー」のような小さな移動手段や小型周遊バスなしで、エリアを周遊させるまちづくりはあり得ない。QURUWAルートにおける歩く以外の移動手段の検討を急ぎたい。まちなかを遊園地のように回る「ぐるっぴー」を参考にしたい。

また特筆すべきは、運行ルート付近の60社のうち半分の30社が運営サポーターとして協賛している点にある。どれだけ行政が頑張っても、取組地域からの応援や同じ方向でまちづくりを考えてくれなければ「絵に描いたもち」である。事業者や市民の応援を受けた取り組みは強い。強力なリーダーシップを持つ方が中心となっているとの事だが、人が集まれば新たなビジネスが生まれ、新たなまちづくりの展開も見えてくる。

駅前の民間投資を利用した時期での事業の開始も、当該エリアの公民がしっかり連携できた好事例である。高千穂通りにて自転車道の工事が進んでいる最中であり、今も中心市街地のまちづくりは進んでいる。数年後、再度訪れ、検証したい。

### 【同行者の所感】

#### 野本議員

宮崎市のグリーンスローモビリティは、中心市街地衰退の危機に対し、市民・事業者・行政が一体となって再生を目指す好事例と言える。特筆すべきは、単なる移動手段にとどまらず「乗って楽しい」という体験価値を重視し、特に子どもを起点に家族全体の来街動機を生み出す戦略だ。官民が信頼関係を築き、地域主体で柔軟に運営することで、街への愛着と交流の輪を広げている。

本市においても、中心市街地や観光エリアの活性化には、単に交通の利便性を高めるだけでは不十分である。環境に配慮した低速モビリティを導入し、沿線でのイベントや物販、文化体験と連動させることで、「移動そのものが目的」となる仕掛けが求められると考えられる。

また、子どもや観光客など感度の高い層を起点に人の流れを生み、地域全体の回遊性を高めるべきだ。行政は制度面・財政面で後押ししつつ、運営は地元主体で行うことで、自発的なまちづくりのエネルギーを引き出せると期待する。

# 政務活動旅行報告書

作成者：野本 篤

## 【視察概要】

日時：令和7年7月31日 10:30～12:00

場所：宮崎県日南市飫肥 小村寿太郎記念館

対応：一般財団法人 飫肥城下町保存会 事務局長 後藤廣史氏

目的：飫肥城下町食べあるき・町あるき事業について

同行者：野々山雄一郎議員



## 【調査内容】

宮崎県日南市の飫肥（おび）地区は、江戸時代の城下町としての歴史的価値を活かし、観光資源としての再評価・活用を進めている。地域住民と行政が協働し、歴史的景観や文化財を守りつつ、現代的な観光戦略と結びつけることで、地域の活性化を図っている。

### ●歴史資産の活用とシティプロモーション

飫肥城跡を中心に、武家屋敷や町並みが保存・整備され、重要伝統的建造物群保存地区としての景観保全が行われている。これらの歴史的建築物は資料館や交流施設として再生されており、訪問者に学びと体験の場を提供している。また、旧家をカフェや宿泊施設などに転用し、地域資源の現代的活用も進められている。



### ●地域住民との協働とまちづくり

飫肥地区では、住民主体のまちづくり協議会やNPOが積極的に関与し、観光案内やイベントの開催、景観保全などを行っている。行政との連携によって持続可能な観光まちづくりが実現しており、単なる観光地化ではなく「暮らしと歴史の共存」を目指している点が特徴的である。



### ●食文化を活かした観光戦略

飫肥名物の飫肥天（おびてん）は、魚のすり身に黒砂糖などを加えて揚げたもので、食べ歩きグルメとして観光客に人気がある。地元食材を使った創作料理や、食体験（例：飫肥天づくり体験）など、地域の食文化を観光コンテンツとして展開する動きがみられる。地産地消を意識した取り組みは、地域経済の活性化にも寄与している。



## ●今後の展望

飼肥の取り組みは、歴史的資産を保存しつつ現代的価値を創出する成功事例といえる。今後は、インバウンド観光への対応や、ワーケーション・ロングステイといった新たな観光形態への対応が求められる。また、地域の食文化を起点としたブランド形成や、観光消費の地域内循環を促進する仕組み作りが鍵となる。

### 【考 察】

本市には岡崎城や八丁味噌などの歴史・食資源を有するが、それらを一体的に結びつけた持続可能なシティプロモーションができているとは言い切れない。宮崎県日南市飼肥地区の事例は歴史景観の保存と現代的活用、食文化の高付加価値化による地域経済活性化の好例であると言える。本市も同様に、未利用の歴史建築をカフェや宿泊施設、体験拠点へ転用し、維持費を観光収益で賄う仕組みを構築できるのではないかと考えられる。

さらに八丁味噌や三河産食材を活かした食体験や食べ歩きイベントを展開し、観光客に記憶に残る価値を提供することが重要であり、加えて観光協会、商工会、住民団体による協働体制を整え、ボランティアガイドやイベント運営への支援制度を設けることで、観光消費の地域内循環が活性化すると共にシビックプライドの醸成が期待できるのではと期待する。

### 【同行者所感】

#### 野々山議員

食べ歩き・町歩き事業は岡崎市にも取り入れたい取り組み。地域資源と既存の観光資源を利用するので、新たな予算の必要がない。例えば、東岡崎と岡崎城にて、岡崎城・家康館共通入場と近隣の飲食店や販売店で商品引換券をセットにして販売する。魅力的な商品があれば、そこまで歩いていくことで、まちなかに新たな人流が生まれる。

引換券がきっかけで「ここにこういう店があったんだ」という発見、また引き換え商品とは別の商品に魅力を感じ、購買行動に進む場合も多い。

こうしたセット券の販売は、観光バスで岡崎城に訪れた観光客にも効果がある。短い滞在時間でも商品引換券でまちなかに足を運ばせることが可能であり、従来は城と家康館見学程度の旅行のタイムスケジュールが、こうしたセット券の存在で現在より岡崎の滞在時間を延ばす行程もできてくる。当然、市民も岡崎再発見を楽しみながら、町歩きができる。岡崎駅周辺、本宿駅周辺、宇頭駅など、食べ歩き・町歩き事業が可能な地域は多い。町中に観光資源が点在する岡崎市のデメリットが、それぞれ特色ある食べ歩き・町歩き事業が可能というメリットになる。

既存の観光資源・民間店舗を活用するお金のかからない取り組みであり、早急な仕組み作りを行いたい。